

## 御伽草子『木幡狐』諸伝本における巻末部の問題

— 徳江氏蔵本を中、心に —

大坪 俊介

狐の娘・きしゆ御前を主人公とする御伽草子『木幡狐』は、古い形の異類婚姻譚に子別れなどの新しい要素を取り込んだ作品で、物語としての要素をより強調して書かれた、狐の異類婚姻譚の正当な後継作といえる作品である。ここでは徳江元正氏蔵本『木幡狐』の巻末部に弘法大師の化現とされる犬が登場するという問題について、諸先行研究を踏まえて考察をする。『木幡狐』は比較的流程していた作品のようで、徳江元正氏蔵本に加えて、渋川版本、実践女子大学図書館蔵本、岡見正雄氏蔵本、ローマ東洋美術館蔵本、御影文庫蔵本、内閣文庫蔵本の七種類が伝本として確認できる。

この『木幡狐』という狐の異類婚姻譚において犬が別れの原因になっているのは、犬が番犬という性質の延長線上に異界のものを撃退する力を持つと期待されたことや、他の古典作品においても犬と狐の関係が陰悪なものとされていることからして不思議なことではない。その中で徳江元正氏蔵本『木幡狐』にのみ犬に対しての過剰な賛美表現が見られる。巻末部を除くと諸伝本での大きな異同はあまり見られない『木幡狐』ではあるが、徳江元正氏蔵本には他の伝本には存在していない記事がいくつかあり、「里心のついたきしゆ御前が、少納言に頼んで木幡の里の藤の花をとつてきてもらう」「きしゆ御前のいなくなつた里で親狐が嘆く」といった場面が挿入されている。このように、巻末部で弘法大師の化現とされる犬に対して多くの賛美表現がなされていること、諸伝本にない

場面が存在することからしても、少なくとも単純に後日談を付け加えただけでなく、徳江元正氏蔵本『木幡狐』が犬と弘法大師を結びつける意図を持った上で弘法大師のご利益を謳う目的で作られた可能性は高い。既存の『木幡狐』という御伽草子について、弘法大師と稲荷の両系統の信仰を持った人物が弘法大師信仰の流布を目的として加筆修正して書いたものが徳江元正氏蔵本『木幡狐』だと捉える方が自然ではないだろうか。

『木幡狐』伝本全体に共通する問題としては、「いなりみやうじんの御ししやたる」狐の娘・きしゆ御前を主人公として始まる物語が、「かゝるちくるいだにも、こしやうほだいのみちをねがふならひなり」と仏教的な結末に着地している点が興味深い。弘法大師と稲荷の関係に目をやると、「稲荷鎮座由来」に

弘仁七年孟夏比。大和尚斗藪之時。於紀州田邊宿。遇異相老翁。其丈八尺計。骨高筋太。内含大權氣。外示凡夫相。見和尚快語曰。吾在神道聖在威徳也。方今菩薩至此所。弟子幸也。(中略) 同十四年正月十九日。和尚忝賜東寺。(中略) 其後同四月十三日。彼紀州之化人來。臨東寺南門。荷稻提摺葉。

と、弘仁七年に紀州田辺にて弘法大師が異相の老翁に会い、その後その老翁が東寺に稲を荷つて訪れたため稲荷と号したという記事が見られる。東寺と稲荷に深い関係があったことは民俗学的な視点からも多くの論文で指摘されており、稲荷信仰の流布に東寺系の信仰を持つ人々が一役買っていたのではないかとする論もある。さらには弘法大師伝承を付随する稲荷社が全国に見られるという事実もある。これらのことから、稲荷と東寺、稲荷信仰と仏教との関係の深さが窺えるため、稲荷信仰的な要素を持つ『木幡狐』が仏教的な結末を迎える点について少なくとも不自然さは拭うことが出来た。

一方、弘法大師と犬の関係を見ていくと、「金剛峰寺修行縁起」に

以弘仁七年孟夏之比<sup>二</sup>。出<sup>三</sup>城外<sup>一</sup>經歷矣。大和國宇知郡逢<sup>二</sup>一人獵者<sup>一</sup>。其形深赤。長八尺計。着<sup>二</sup>小袖青衣<sup>一</sup>。骨高筋太。以<sup>二</sup>弓箭<sup>一</sup>帶<sup>レ</sup>身。大小犬隨<sup>二</sup>從之<sup>一</sup>。則見<sup>三</sup>和尚過通<sup>一</sup>。問<sup>二</sup>不審<sup>一</sup>。和尚踟躕問<sup>三</sup>訊子細<sup>一</sup>。獵者云。我是南山犬飼。所<sup>レ</sup>知山地萬許町。於<sup>二</sup>其中<sup>一</sup>有<sup>二</sup>幽平原<sup>一</sup>。靈瑞至多。和尚來臨住。自以助成矣。追<sup>二</sup>放犬<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>走之間即失<sup>三</sup>云<sup>一</sup>。

と弘法大師が高野山開山の伝説において犬に導かれているという記事が見られることをはじめ、弘法大師に關係する文献の各所に同様の記事があることがわかる。さらには、高野山開山の伝説において犬が弘法大師を導いているのと同様に、徳江元正氏蔵本『木幡狐』の卷末部でも犬の導きによって親子の再会が果たされている。弘法大師と犬の間にも深い關係があること、どちらの話でも犬が導き手となっていることなどから、徳江元正氏蔵本『木幡狐』において犬が弘法大師の化現と語られる要素が揃っていることも十分確認できた。

弘法大師と稲荷の關係、弘法大師と犬の關係はここまで述べてきたとおりだが、徳江元正氏蔵本『木幡狐』卷末部には弘法大師信仰と並立して阿弥陀信仰が語られているという問題がまだ残っている。その点についての考察を深めていくことが今後の課題である。

(大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程)